

An Ethnoarchaeological Analysis of Paiwan (Taiwan) Snare Hunting : Methodological Discussion of the Interpretation of Faunal Remains

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004082

民族考古学的アプローチにもとづくパイワンの罾猟研究

——動物遺存体の解釈に関する一試論——

野 林 厚 志*

An Ethnoarchaeological Analysis of Paiwan (Taiwan) Snare Hunting: Methodological Discussion of the Interpretation of Faunal Remains

Atsushi Nobayashi

本稿では、台湾原住民族のパイワンが行なってきた罾猟活動の遺跡化を考察した。具体的には、罾猟によって実際に捕獲されたイノシシの下顎骨を動物考古学における基本的な手法によって定量的に分析すると同時に、罾猟の具体についての観察、記録を行ない、人間の行動とそれによって生じる潜在的な考古学資料との関係を明らかにした。考古学資料は様々な手法を用いて分析することはできても、その結果を解釈するためには、かならず解釈の材料となるモデルが必要となる。本研究が提示するデータ及びその解釈は、同様な出土遺物をもつ遺跡の機能や過去の行動を解釈する際に有効な民族考古学的モデルとなる。

This paper discusses the formation process of archaeological materials derived from hunting activity, such as that conducted by the Paiwan (an aboriginal group of Taiwan). The mandibles of a wild boar (*Sus scrofa*), captured by snare hunting, were analysed using a zooarchaeological technique. Native people were asked to reconstruct their hunting activity, and this was observed. The relation between the hunting activity and the faunal remains is discussed.

Archaeological materials can be analysed using various techniques. What is needed is a standard model with which to interpret the results. This paper provides one such ethnoarchaeological model which should prove effective in interpreting similar materials and understanding past human behaviour.

* 国立民族学博物館民族学研究開発センター
総合研究大学院大学先端科学研究科生命体科学専攻

Key Words : Ethnoarchaeology, Taiwan Aborigines, wild boar (*Sus scrofa*), snare hunting, faunal remains

キーワード : 民族考古学, 台湾原住民族, イノシシ, 罾猟, 動物遺存体

1. はじめに	4. 動物遺存体の分析
2. 民族考古学とは	4.1 動物の齢査定
2.1 考古学資料の性質とその解釈	4.2 分析資料
2.2 民族誌類推と民族考古学	4.3 結果
2.3 動物考古学と民族考古学	5. 考察
3. パイワンの狩猟活動	5.1 捕獲数パターンとその要因となる背景
3.1 調査対象と調査内容	5.2 考古学的課題への援用
3.2 台湾における狩猟活動の変遷	6. 結語
3.3 猟場における活動	

1. はじめに

本研究の目的は、台湾原住民族の一集団であるパイワンが行なってきた狩猟活動の遺跡化を考察することである。具体的には、かつて罾猟を行っていた人たちによって再現された罾の準備から設置にいたるプロセスを観察、記録すると同時に、かつて罾猟によって捕獲された後、トロフィーとして保持されてきたタイワンイノシシ (*Sus scrofa taiwanus*) の下顎骨を動物考古学における基本的な手法によって定量的に分析する。これら2つの結果を連結させながら、両者の関係について考察し、考古学的資料としての動物遺存体に、過去の人間の行動やその他の諸条件がどのように反映されているのかについて検証を行なう。

狩猟活動に関する民族考古学的研究は、ビンフォードによるスナミウトのカリブー猟の調査、バートラムのサンの食糧残滓に関する調査、オブライアンによるハッザの狩猟活動の調査など、もっぱら狩猟採集活動を経済活動の基盤とする集団を対象にして行なわれてきた (Binford 1978; Bartram 1993; O'Brien 1994)。これらの研究では、集団の移動パターン、狩猟方法、動物資源の利用様式といった人間の行動が、それによって生じる物質的記録、とりわけ考古学資料としてきわめて一般的である動物遺存体にどのように反映されていくかについての議論が展開されてきた。一方、農耕民の狩猟活動については、生態人類学、民俗学などの分野における先行研究は数多くあり、狩猟活動の経済的評価、狩猟技術やその伝承に関する記述、狩猟者の自然観など、農耕民の狩猟活動を理解するうえで重要な意義をもつ成果も多い。しかしながら、こうした分野における研究では、考古学者にとって必要な狩猟行動の遺跡化に関するデータが必ずしも十分に提供されておらず、考古学資料の解釈に十分寄与できるとは

言いがたい。

従来の生態人類学や民俗学で行なわれてきた農耕民の狩猟活動に関する研究と民族考古学的アプローチにもとづく本研究との違いは、後者が狩猟活動にともないどのような物質的記録が残されるかという問題の検証に主眼をおいている点である。とりわけ動物骨という具体的な考古学資料を分析するうえで、人間や動物の行動を含めた狩猟活動の復原に寄与するモデル構築を本研究は目指すものとする。

2. 民族考古学とは

2.1 考古学資料の性質とその解釈

考古学資料はあくまで物質にすぎない。考古学資料を用いて過去の人間の行動を復原する場合、考古学資料と行動とを結ぶ仮説モデルが不可欠である。こうした仮説モデルを考古学資料に活用し、過去の行動を復原する作業は、現代の人間の行動、現代の人間の行動から生じる物質的記録、過去の人間の行動、過去の人間の行動から生じる物質的記録（考古遺物）の4者の関係を明確にすることによってはじめて論理的な整合性が認められると考えてよい。以前、筆者は、これら4者の関係について論じたことがあり、過去と現代との接点については、谷が民族誌類推や民族考古学の方法論的課題を視野にいれた包括的な論考を著わしている（野林 1997: 84-85; 谷 1998）。

本章では考古学資料の解釈という操作を整理するとともに、解釈の方法としてこれまで用いられてきた「民族誌類推」とは異なる立場である「民族考古学」について簡潔に解説を行なう。そのうえで、動物考古学と民族考古学との問題意識における接点について述べる。

2.2 民族誌類推と民族考古学

考古学資料の解釈という行為は、考古遺物をその形態から分類する最初の段階から始まっていることが少なくない。とりわけ、石器、骨角器、土器などは最初から道具として解釈され、その名称は用途に対応したものであることが多い。これは、谷が「常識による類推」と呼んでいるものに相当すると考えてよいであろう（谷 1998: 209）。例えば、金子らは縄文時代の骨角器を分類するうえで、最初の基準にそれらの用途を想定し、生産・生活用具と装飾・呪術用具とに大別した後で、形態上の分類を行なっている（金子・忍沢 1986: 9）。しかしながら、生産具や呪術用具という分類はあく

までそれらが用いられたコンテキストが明確な場合にのみ言及可能であり、行動と切り離された状態で出土した遺物について機能上の分類を最初から行なうことは本来不可能と考えなければならない。機能的な分類を最初から行なうためには、考古学資料がその機能を直接反映するような状態で出土するか、もしくは分類する側に最初から資料の形態と機能とを連結させるモデルや知識が存在し、それをもとにした類推が行なわれる必要がある。谷は、考古学者が行なう類推について、ほとんど無意識に行なうものから「モデル」と呼ばれるような非常に周到なものを用意して行なうものまで、その計画性の度合いは千差万別であると述べている（谷 1998: 208）。そして、類推の根拠となるモデルや知識が民族誌から引き出されてきた場合、それは特に「民族誌類推 (ethnographic analogy)」と呼ぶことができる。物質資料と過去の行動とをつなぐ過程を総称して民族誌類推と呼ぶ立場もあるが（谷 1998: 208）、本稿においては、「民族誌」という言葉の定義を尊重し、既存の民族誌や民俗例などを手がかりに考古学資料の解釈とそれともなう過去の行動の推論を行なうことを「民族誌類推」ととらえることにする。

ところで、「民族誌類推」に限らず、考古学における類推には、類推に用いるモデルと類推の対象となる過去に起こった現象とが構造的に同じであることを説明するための根拠が必要となる。この根拠は「斉一性の仮定 (doctrine of uniformitarianism)」によって保証されると考えられてきた。斉一性の仮定とは、もともと地質学の理論的枠組みの中から生まれた概念である。過去に生じた地質現象によって生じた地形的特徴は、現在に起こっている同様な地質現象によって生じた地形的特徴と同じであるという考え方であり、18世紀末にハットンによって提唱されたことが知られている（Thomas 1990: 161）。過去の行動を復原するという文脈では「現在における人間の行動によって生じる物質的記録は、過去における同様な行動から生じた考古遺物と同じである」と言い換えることができる。もちろんここで述べる人間の行動は、それをとりまく自然的、社会的、文化的、歴史的環境を包括しており、それらすべてが全く同一であり、同一の物質的記録が生じるという状況はありえないであろう。したがって、重要なのは斉一性が保証される部分をどのように抽出することができるかということになる。

渡辺が批判的に言及している、用途不明の遺物を、これと似たものを現生民の民族誌の中に探し出して、その類似品の用途から遺物の用途を推定するといった、いわゆる「民族誌的対比法」(ethnographic parallel) は、この斉一性の保証が最も脆弱な方法であろう（渡辺 1993: 5）。これに対して「民族誌類推」における斉一性を保証す

るための1つの手段として、経験則による一般化、すなわち命題の妥当性やある文化事象同士の相関関係を示すために肯定的な民族誌の例を数多く並べる方法がとられてきた(Chang 1958)。この方法では、帰納的な事実の集積とそこから引き出される何らかの規則性が重視される。一方で、特定の事象が生じた背景や理由について検証されることは少ない。典型的な例と見なされた2、3の事例を参照して行なわれる、いわゆる過去を現在の型に無理やりにあてはめてしまう前者に比べれば、信頼性は増していると考えてもよいであろう(谷 1998: 210)。しかしながら、考古学の基本的な方法が形態学的研究に基礎をおく物質文化の解釈である以上、既存の民族誌を用いた類推の限界は自ずから明らかであろう。なぜならば、大半の民族誌には考古学資料と比較検証するにたる物質的記録に関する記述や情報がないからである。これは、民族誌に問題があるのではもちろんない。民族誌が記述される目的は考古学研究に利用可能なデータを供給することではないからである。問題は、むしろ異なる目的で書かれた民族誌を安易に考古学資料の解釈に利用してきた考古学者側にあると考えられる。

民族考古学は、従来行なわれてきた民族誌を用いた類推とは全く異なる概念であり方法である。このことは渡辺によってもすでに指摘されていることであり、特に、民族誌の物質的側面を強調するという理由から、‘ethnoarchaeology’の訳語として、「土俗考古学」という名称を使用している(渡辺 1993: 11)。民族考古学を「土俗考古学」と呼ぶことの是非はともかく、民族考古学的研究と民族誌もしくは「民族誌類推」との違いを再確認するならば、それは、人間の行動にともなう物質的記録、換言すれば潜在的な考古学遺物に関する記録が考古学者の扱えるような情報として提供されているという点にある。本稿において定義する民族考古学とは、「現代の行動の観察とそこから生じる物質的記録の分析を通し、考古学資料の生じた背景と資料の各属性との関係を研究する分野」である。換言すれば、民族考古学者の目的は物質記録に刻み込まれた人間の営みを読み取るための理論と方法とを確立することにあると考えてよい。

2.3 動物考古学と民族考古学

遺跡から出土する動物骨や歯牙の分析を通して、過去の社会を復原する研究分野は特に動物考古学と呼ばれている。動物骨や歯牙には時間、気候、環境、生業、解体過程、交易などに関する様々な情報が含まれている可能性がある。こうした情報を引き出すために、動物考古学者はまず解剖学的観察による部位同定に始まり、部位別出現

頻度、性比、種間比、死亡年齢、解体痕などの分析によって、当時の人間の行動や自然環境の復原を試みる。当然のことながら、データの解釈にはモデルが必要となる。とりわけ、動物考古学で扱うのは動物骨や歯牙に関する定量的データであることが多く、定性的な記述にすぎた民族誌や民俗学的研究はデータを解釈するためのモデルの提供には必ずしも適当ではない。このため、動物遺存体に関する定量的データを検証するために現代の集団の狩猟活動を対象とした民族考古学的研究が盛んに行なわれてきた。

狩猟活動の民族考古学的研究に先鞭をつけたのは、ルイス・ビンフォードである。ビンフォードはアラスカのヌナミットの行なう季節性が顕著な生業活動に着目し、その狩猟形態、動物の解体、分配、貯蔵などの各活動のプロセスと同時に、これらの活動によって生じる現在の遺跡の分布とそこに残されていく動物遺存体の組成や破損状況などを克明に記録、分析した (Binford 1978)。ビンフォードの一連の調査からは遺跡形成に関する様々な知見が得られたが、とりわけ、動物の各部位における経済的有用性を示す指数などを用いて説明された、遺跡の機能と残存する動物遺存体の組成との関係は、動物遺存体の分析によって過去の経済や遺跡の機能を論じるうえでの非常に有効なモデルととらえることができる。また、ジェームス・オコンネルらのグループはアフリカの初期人類の生業戦略のモデルとして議論されてきた狩猟とスカベンジング(死肉あさり)による動物遺存体の形成を検証するために、動物資源を獲得する手段として狩猟とスカベンジングを行なうタンザニアのハッザを対象にした民族考古学的研究を実践している。オコンネルらのハッザのデータはスカベンジングでしか獲得できない象のような大型哺乳類を除けば、狩猟とスカベンジングで得られる中型の哺乳動物は主として成獣が捕獲されることを示しており、従来、考古学者が通説としてきた、狩猟とスカベンジングとでは狩猟によって遺跡に集積される動物は若齢が主体でサイズにばらつきが少ないという解釈とは異なる仮説を示している (O'Connell et al. 1988)。また、ハッザが狩猟(もしくはスカベンジング)、解体、運搬、分配を行なう過程において、居住地からの距離、運搬可能な個体数、解体や消費に費やす時間などによって、それぞれの活動地点では残存する動物骨の組成が異なることが示され、動物遺存体の形成の背景に多様な要因が関与していることが指摘された (O'Connell et al. 1988: 149)。日本でも近年になって狩猟活動に関する民族考古学的調査の実践例が見られるようになってきている。佐藤らは日本列島における狩猟文化の展開と罾猟を中心とした狩猟システムの機能上における構造的類似性を検証することを目的とし、東北地方のマタギやロシア沿海州のウデへの狩猟活動に関する一連の調査を行

なっている (佐藤 1998)。

本研究において分析の対象としたイノシシは、日本における縄文時代遺跡の出土資料に非常に多く見られる動物種である。生業活動の季節性や狩猟選択といった問題を論じるための材料として、貝類、魚類、シカなどとともに分析の対象となってきた。イノシシの出土資料をあつかった研究としては、新美の伊川津遺跡における定量的な分析をもとにした狩猟活動の季節性についての議論をあげることができる (新美 1991)。新美は、縄文晩期の貝塚遺跡である伊川津遺跡から出土したイノシシの下顎骨における歯牙の萌出状態と歯牙のセメント質に形成される年輪の観察から、捕獲個体の齢構成を復原した。新美の議論では、捕獲個体がすべての季節に生じたという事実は明確にされたものの、具体的な狩猟活動の動態に関する議論はほとんど行なわれていない。こうした背景には、捕獲個体の齢構成という属性が過去におこったどういった出来事とどのような関係をもつかということに関して有効なモデルを持ち合わせていなかったことを指摘することができる。

本研究は、イノシシという具体的な動物種を対象にした分析を行ない、狩猟活動による捕獲個体の齢構成という属性と狩猟活動や動物の生態学的な性質などとの関係について見通しを与えることをねらいとしている。こうした脈絡においては、ビンフォードやオコンネルらの行なった民族考古学的研究と軌を一にするものと言ってよい。

3. パイワンの狩猟活動

3.1 調査対象と調査内容

調査を行なったのは台湾の南部に位置する T 村である (図 1)。標高約 150 m の山間部に立地する T 村は、その住民の大半が台湾原住民族のパイワンである。パイワンは台湾南部の屏東県及び台東県の丘陵地帯から山麓地帯に居住する人口約 6 万 6 千人の集団である。言語学的にはオーストロネシア語族の台湾諸語に属するパイワン語を母語としている。パイワンという民族名称の由来は、彼らの故地とされる北大武山の西側にある村の名前に由来すると考えられている。パイワン社会の特徴は、世襲制の首長制を有し、首長と平民層の 2 つにわかれる社会階層制を発達させてきたことである。同じような首長制は隣接するルカイやプユマにも見られ、とりわけ、ルカイとは世襲法の違いを除けば、首長制の維持、運用面については実質的な差異はほとんど見られず、互いの首長層同士の通婚もしばしば行なわれていた。日本や台湾による

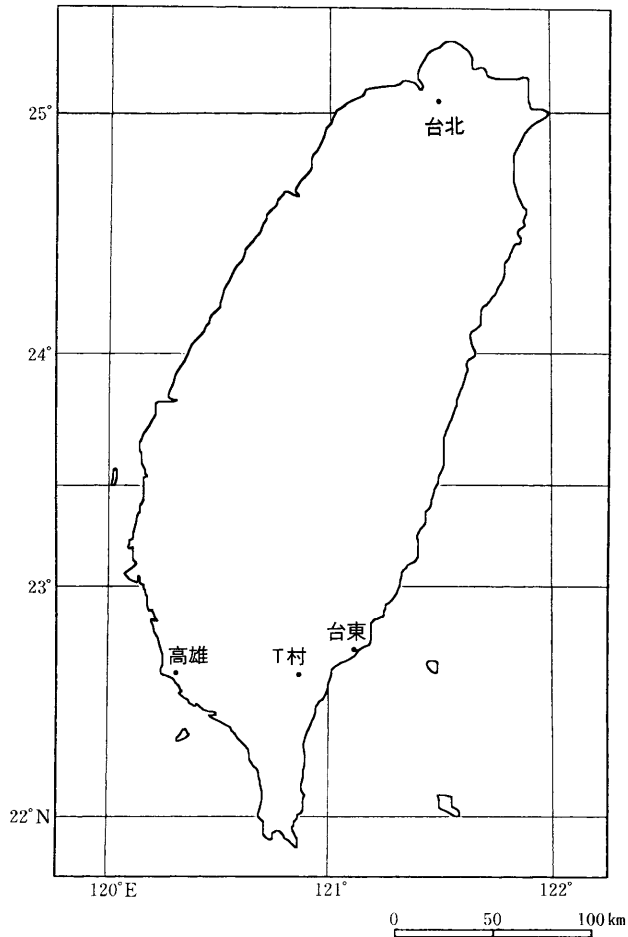


図1 台湾及びT村の位置

統治の過程において、首長層の政治的、儀礼的権威は弱体化しているものの、従来からの婚姻関係によって展開させてきた首長層のネットワークなどによって、首長層が指導力を発揮する場面も少なくない。

経済活動の基盤となっていたのは、アワとイモ類などの焼畑耕作と狩猟活動とを組み合わせた生業活動であったが、1970年代以降、若い世代を中心に都市部への移住が進み、慣習的な暮らしは衰退している。しかしながら、高齢者層を中心にアワの焼畑耕作も続けられており、集落周辺の山間部に開かれたアワ畑を見ることもめずらしくない。調査を行なったT村でもアワの焼畑耕作を続けている住民は多い。また、現在では中華民国の環境保護政策により狩猟活動が制限されているものの、その方法に

ついて明確に記憶している人が多いため、パイワンの狩猟活動を復原するうえで適していると考えられた。

T村で行なった調査は、具体的には次の通りである。

- 1) 罽獺の復原過程の観察及び記録
- 2) 罽獺によって捕獲されたイノシシの下顎骨の分析

1) では、T村に住む70代の男性 S氏に、かつて罽獺を行っていた猟場において罽の設置を実際に復原してもらった。S氏は現在でもアワヤイモ類の焼畑耕作を続け、基本的にはこれら収穫物に依存した生活を送っている。また、日本統治時代からシカやイノシシの狩猟を積極的に行っていた。2) は、S氏がかつて罽獺によって捕獲したイノシシの下顎骨について計測、及び歯牙の萌出と咬耗の状態について観察、記録を行なった。また、比較資料として S氏の弟である L氏が捕獲したイノシシの下顎骨についても同様な分析を行なった。

以上の調査結果といくつかの史料をもとに、台湾における狩猟活動の変遷とパイワンが行なってきた狩猟活動の実際について記述する。そのうえで、罽獺によって捕獲されたイノシシの下顎骨の分析法とその結果を示し、罽獺とそれから生じる動物遺存体の属性との関係について民族考古学的な考察を加えることにする。

3.2 台湾における狩猟活動の変遷

台湾における最も古い先史時代遺跡は約1万5千年前の長濱洞窟遺跡で、旧石器とともに大量の獣骨や骨角器と思われる遺物が出土している(臧 1995: 44)。現在のところ、これが台湾における最も古い動物資源の利用と考えてよい。新石器時代に入ると狩猟活動が生業活動の中心となっていたと考えられる証拠が数多く見つかっている。シカやイノシシなどの動物骨とともに狩猟に使用したと考えられている石鏃などが大半の遺跡で発見されている。ここで注意しなければならないのは、これらの先史時代文化をになっていた人たちと台湾原住民族とが歴史的に連続したつながりをもつという明確な証拠はないということである。しかしながら、先史時代から現代まで自然環境への適応戦略の1つとして、シカやイノシシを主な対象とした狩猟活動が継続的に行なわれてきたと考えることはよいであろう。台湾に関する記載が中国の歴史史料に現れるようになって以降は、台湾原住民族の祖先集団の狩猟活動の証拠を具体的に知ることが可能となる。清代に描かれた『台番図説中』の「捕鹿」という題名の図

画には、犬に鹿を追い込ませながら弓矢を用いて狩猟を行なう様子が描かれている。また、その題字には、当時熟番と呼ばれた平埔族の人々が秋から冬にかけて狩猟活動を行っていたことが記載されている。オランダ統治時代には原住民族の狩猟活動で得られた鹿皮が主要な交易品となった。伊能は、『諸羅縣志』や『彰化縣志』などの記述にもとづき、鹿皮の主要な輸出先が日本であったと指摘している（伊能 1904: 38）。

日本が統治していた時代にも原住民族の間で狩猟活動が盛んに行なわれていた。台湾総督府は理蕃政策を効果的に進めるために各種の調査事業を数多く行なった。とりわけ、1901年に布告された臨時台湾旧慣調査会規則にもとづく同調査会の発足以降は、継続的かつ組織的な調査が実施され、各種の報告書が刊行されている。これらの報告書には、原住民族の狩猟活動に関する記載も多く、パイワンの狩猟活動についても詳細な記述が残されている（臨時台湾旧慣調査会 1918; 台湾総督府蕃族調査会 1922）。

パイワンが狩猟の主たる対象としてきたのは、シカ (*Cervus unicolor swinhoei*)、キョン (*Muntiacus reevesii micrurus*)、ヤギ (*Capricornis crispus swinhoei*)、イノシシ (*Sus scrofa taiwanus*) である。これらの動物の狩猟は、肉や毛皮の利用を目的として行なわれていた。肉や毛皮以外では、雄イノシシの犬歯が首長の頭飾りなどに用いられている。この他にタイワンザル (*Macaca cyclopsis*)、クマ (*Selenarctos tibetanus formosanus*)、ムササビ (*Petaurista petaurista grandis*)、センザンコウ (*Manis pentadactyla pentadactyla*) なども狩猟の対象とされてきた。

T 村での聞き取り調査によれば、日本統治時代における狩猟活動は銃を用いた追跡もしくは追い込み猟が主体であった。当時、銃器は村内の駐在所に保管されており、狩猟活動を行なう場合は2、3日から1週間ほど銃器を借り出し使用していた。第二次大戦後、中華民国政府によって銃火器の取り締まりが強化され、民間人の銃器の使用が基本的に禁止された。これ以降は、もっぱら脚くり罾やとらばさみによる罾猟が行なわれるようになった。

3.3 猟場における活動

図2は、S氏が罾を設置していた猟場と集落との位置関係を示したものである。猟場は集落から約3kmの山中に位置しており、標高200~300mの範囲にあった。この地域の年間降水量は3729mmと台湾東部地域でも比較的湿潤であり（中華民国自然生態保育協会 1994: 38）、北回帰線よりも南に位置するために基本的には熱帯性気候帯に属し、常緑の広葉樹を中心とした熱帯雨林が発達している。動物相は、イノシ

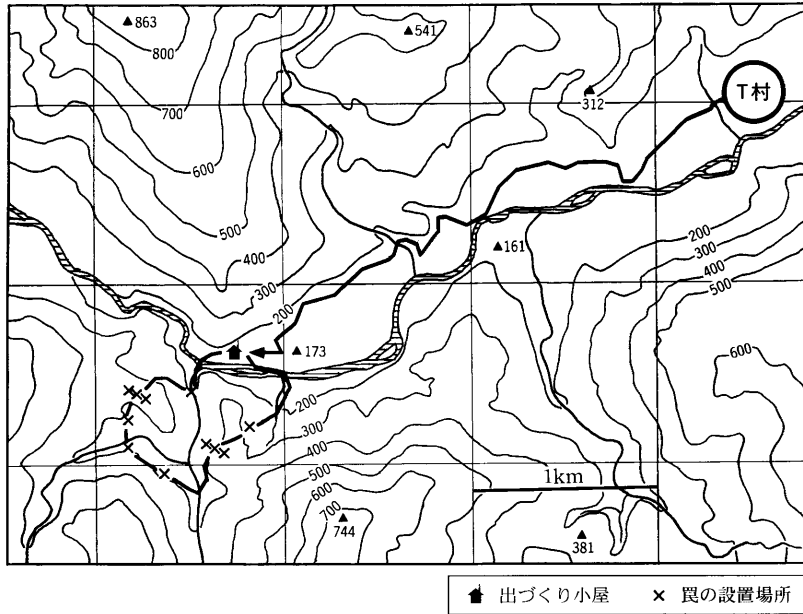


図2 T村とS氏の罾場との位置関係

シ、シカ、キョン、ヤギ、タイワンザルなど、台湾本島に一般的に見られ、かつ狩猟の対象となってきた動物の大半が生息している。

S氏は基本的に脚くり罾と鉄製のとらばさみを罾として用いていた。罾場の入り口にあたる川辺にはS氏の出づくり小屋（以後、出小屋）が建てられていた。出小屋は農耕活動と狩猟活動の両方のために利用され、その建造や利用は個々の家族単位で行なわれていた。S氏は、狩猟活動を行なう際には、定住集落から直接罾場に入ることは少なく、通常は活動の拠点となる出小屋に立ち寄り、罾の準備を行っていた。周囲にはビンロウが植えられており、出小屋から5分ほどの傾斜地には粟の焼畑が作られていた。集落からこの出小屋までS氏が徒歩で要した時間は約1時間であった。出小屋は9×8mの長方形のプランをもつ木造の建築物である。出入りが西向きに設けられている以外には、窓や排煙口といった明かり取りに機能する設備は設けられておらず、日中も出小屋内部は暗い。屋内の設備としては、1人分の寝台が内部の壁面に接して作られ、出口に近い壁面に接するように屋内炉が2基設置され、調理に使用されていた。また、床面には円礫が埋め込まれていた。

罾場は出小屋と川をはさんだ山中に位置していた。山中では、S氏が罾を設置する時にたどる道筋はほぼ決まっており、その道筋を中心にしながら、山側ないし谷側に

設置に適した場所を見つける作業が行なわれた。

一般に罠を仕掛ける場所を決定するためには、罠を仕掛けようとする場所を獲物が通過するという見通しが猟師に必要となる。目的とする動物種によって罠を設置する場所は異なっており、イノシシを対象にした場合、足跡、掘り起こし跡、ぬたばなどが罠を設置するための主な目印とされていた。S氏は、イノシシが斜面地を垂直方向にのぼりおりできず、水平方向に平行移動を繰り返すという習性があるという知識を有していた。このため、残された足跡をまず垂直方向に探し、こうした足跡が平行に複数列残された場所を罠の設置場所として第一に選択していた。次に適していると考えられていたのは、イノシシが野生の根茎類やミミズなどの小動物を捕食するために地面を掘り返すことによって生じる掘起こし跡であった（写真1）。こうした掘り起



写真1 イノシシの掘り起こしの痕跡とその周囲の様子（撮影：野林厚志）



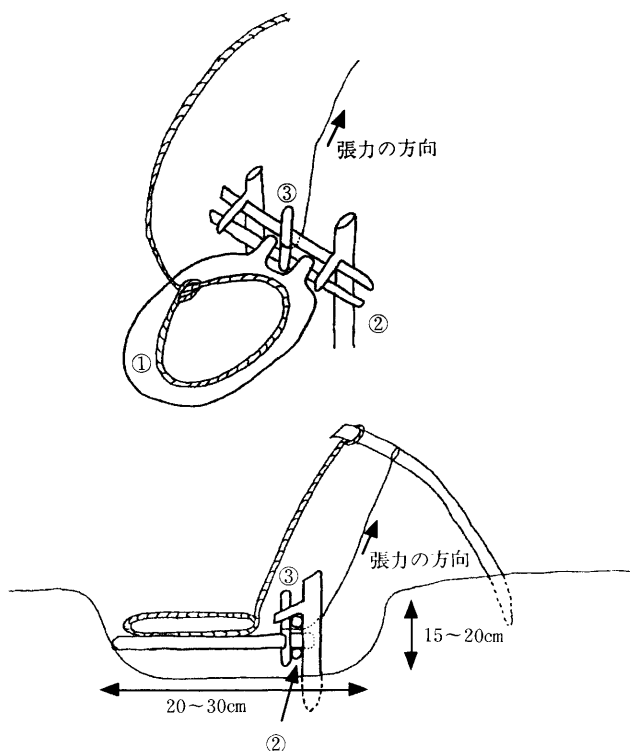
写真2 S氏による罾の設置の様子（撮影：野林厚志）

こし跡のある場所にはイノシシがもどってくることが多く、周囲のまだ採食されていない野生の根茎類などが生えている場所の近くに罾が設置された。ぬたばに関しては、S氏の猟場には水が湧き出る場所が1ヶ所あるが、その場所はS氏が通常通り道とする山道の脇にあるため、イノシシは警戒して近づかないと述べており、この水の湧き出し口周囲に罾を設置することはなかった。一方、雨が降った後に生じる水溜りにはぬたばが作られることも多く、雨の後のこうした場所は効果的な罾の設置場所と考えていた。

イノシシの行動を示す様々な痕跡を手がかりにS氏は罾を設置していたが、これらの罾の設置場所に共通していたのは、比較的緩やかな斜面地であるということである（写真2）。これは先述したように、イノシシが急な斜面地を移動することができないという動物の行動学的特性が罾の設置場所に反映されていると言える。これに対し、鹿やキョンは斜面地を駆け降りることが可能であり、鹿やキョンを狙う場合は、急な斜面地に首くくり罾を設置するのが効果的であるとS氏は考えていた。

罾の設置数は、1日で見回りが可能であること、1度の見回りで持ち帰ることができるのが1頭であるという条件で決定されていた。S氏は10個程度が設置数の限界であると考えていた。猟場全体を踏査したところ、罾の設置に適していると判断されたのが11ヶ所であり、猟場全体を踏査するのに要した時間は約3時間であった。

S氏が設置していた脚くくり罾は、獲物が踏み板を踏み抜くと、支えをうしなった



跳ね罠の作動機序

1. ①の板を獲物が踏み抜く。
2. ①が下がり、②を下に押し出す。
3. ②と③が分離し、③が張力に応じて解放され、罠が跳ねあがる。

図3 S氏が設置していた脚くくり罠

さおが跳ねあがり、同時にワイヤーで足が締め上げられることによって獲物が捕獲されるものである(図3)。材料は基本的には現地調達でまかなう。もともと吊り縄は籐などの蔓性の植物を使用していたが、金属製のワイヤーが容易に入手できるようになってからは、それを使用することが多くなった。

跳ねあげ竿に用いる樹種は特に決まっていなかったが、切り出した木を地面に差し込んで罠を設置する方法をとった場合、雨によって地盤がゆるんだり動物が地面を荒らすことによって固定が不安定となり、獲物が竿ごと逃げてしまう状況がしばしば生じた。そこで、周囲に自生した2mほどの木を利用することも少なくないということであった。

踏み板は、あらかじめ集落や出小屋で準備したものを携えて猟場に入ると、罠

を設置する場所の近辺に生えている木の樹皮をはがして用いる場合とがあった。樹皮が一部はがされた木は近辺に罽が設置されていることを示す目印ともなるため、踏み板を準備していた場合でも、通常周囲の樹木の樹皮をはがして罽の位置を明示することが行なわれていた。

4. 動物遺存体の分析

4.1 動物の齢査定

S氏はパイワンの生業カレンダーにもとづき罽猟を実施しており、焼畑の開墾に労働力を集中させるため罽の見回りの回数が少なくなる時期と、それ以外の時期とが存在していた。つまり、罽は通年的に設置されるものの、見回りの頻度による季節性がわずかながら存在することになる。こうした人間の行動がイノシシの捕獲数に反映するのであれば、生業カレンダーに対応した捕獲個体数の変動が生じることになる。一方で、イノシシの生態学的な性質が狩猟結果に及ぼす影響を無視することもできない。こうした問題を捕獲された個体の齢構成を分析することによって検証することにする。

ところで、動物の齢査定は様々な分野で重要な意味をもっている。動物生態学の分野では狩猟されたり自然死にいたった個体の齢構成を明らかにすることによって生命表の作成が行なわれる。生命表は個体群動態の研究、さらには野生動物の保護や管理を行なうための基礎的データとなる。系統分類学の分野では、生後発生と系統発生との関係が論じられるが、この際にも齢査定は必ず必要となる。学術的な目的とは別に動物の齢査定が行なわれてきた例もある。例えば、馬の仲買人は取り引きの際に馬の口の中を必ず見るが、これは歯の咬耗によって馬の年齢を把握することが主たる目的である。馬の代金を払わないにもかかわらず、年齢を調べるのは失礼だというところから由来する「贈られた馬の口をのぞくな」ということわざ(ラッカム 1997: 17)も歯の咬耗による齢査定が経験的に行なわれてきたことを示すものであろう。

考古学や先史人類学の分野でも、出土した動物遺存体の齢査定が重要な作業の1つとなる。過去の復原を主たる目的とするこれらの分野では、過去の人間の行動を説明するために死亡個体の年齢構成や月齢構成を利用することが多い。出土した動物遺存体の齢構成に偏りが生じた場合、生業活動の季節性や狩猟選択などが過去の活動の中

に組み込まれていたと解釈されたりする。

一般に、哺乳動物の歯は、乳歯が萌出、摩耗、抜け落ちた後に永久歯が萌出、摩耗、抜け落ちるといった過程をたどる。それぞれの歯の萌出時期は動物種によってほぼ決まっているため、歯の萌出状態から個体の齢を知ることが可能となる。本研究で分析の対象としたイノシシの場合、乳歯は切歯3本、犬歯1本、臼歯3本であり、永久歯は切歯3本、犬歯1本、前臼歯4本、後臼歯3本という歯列構成となっている（図4）。出生時のイノシシには上顎、下顎とも第3乳切歯と乳犬歯がすでに萌出しており、生後5ヶ月頃までに全ての乳歯が萌出する。乳歯はすべて垂直交換されるが、永久歯のうち第1前臼歯と第3後臼歯については交換される乳歯が存在しない。

イノシシ永久歯の萌出段階については先行研究も多く、齢査定は比較的容易に行なうことが可能であった。表1は、イノシシの下顎骨における歯の萌出段階についてこれまで報告された事例をまとめたものである（Genov et al. 1991: 400）。いずれの研究も対象となっているのはイノシシ（*Sus scrofa*）であり、それぞれの歯が萌出する時期はほぼ決まっていることが理解できる。したがって亜種レベルでの萌出時期のずれが結果にもたらす影響は少なく、今回、対象とするタイワンイノシシ（*Sus scrofa taivanus*）の齢査定にもこれらの基準を用いることは可能であると判断した。おおよ

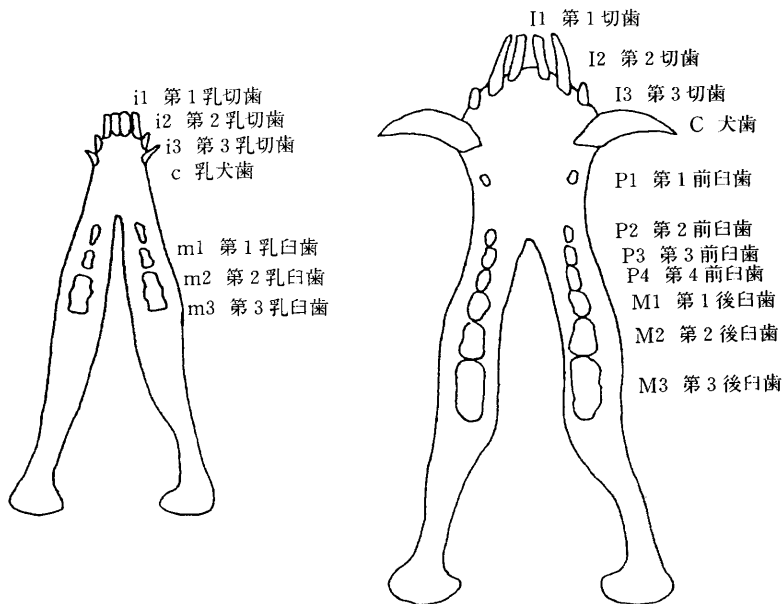


図4 イノシシの歯牙

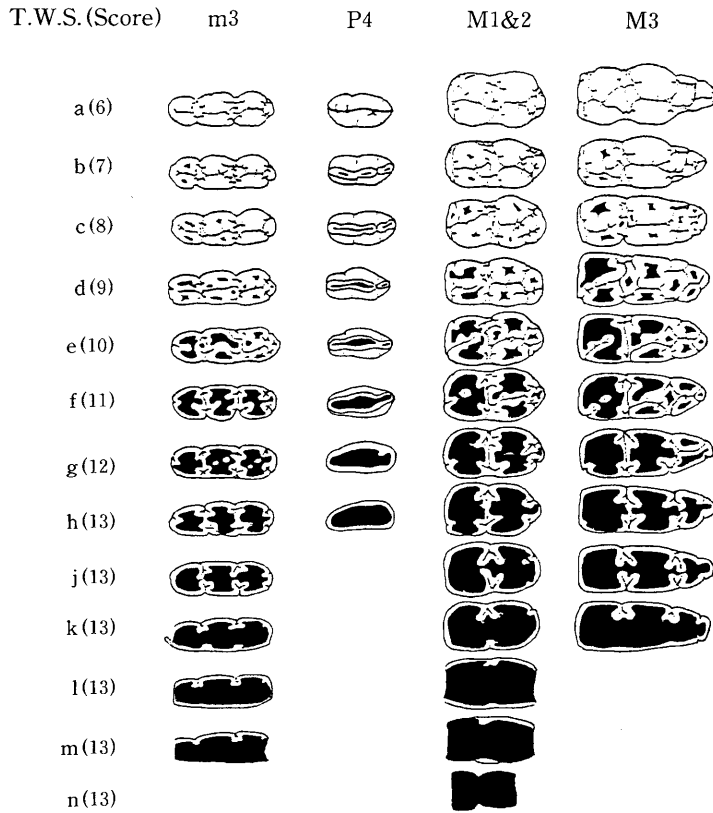
表1 地域別にみたイノシシの歯牙萌出の時期

地域	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
フランス	15	20	11-12	11-12	5-6	15-17	15-17	15-17	5-6	11-12	22
ドイツ	14-17	19-21	10-12	10-12	5-7	14-17	14-17	14-17	5-6	12-14	19-21
イタリア	14	20	12	9	6	18	16	16	5	12	25
ポーランド	15-18	21-22	11-13	10-12	6	14-16	14-16	14-16	6	14-15	20-24
ポーランド	—	22	11	11	5	18	18	18	6	12	24
チェコスロバキア	14-16	18-20	10-12	10-12	5-6	14-16	16-17	14-16	5-6	13-14	22-24
旧ソ連邦	13-15	18-22	9-12	10-11	5-6	16-19	14-16	14-16	5-6	13-15	22-24
アメリカ合衆国	13-15	19-22	7-9	7-11	5-7	15-18	15-18	15-18	5-6	12-14	23-26
コーカサス	13-15	20-24	9-13	9-13	5-6	15-16	15-16	15-16	5-6	13-15	23-36
コーカサス	16-18	18-24	9-13	9-13	5-6	12-14	12-14	12-14	5-6	16	18-24
ブルガリア	13-14	18-24	10-12	10-12	5-6	16-18	16-18	16-18	5-6	13-14	19-24
日本		19-21			6				6		23-26
アルジェリア	12-14	20-24	7-10	9-12	5-6	15-18	15-18	15-18	4-5	11-12	20-25
アメリカ合衆国	12	16-18	8	9-10	5	12-15	12-15	12-15	4-5	8-12	18-20

Genov et al. (1991) より作成
表中の数字は生後の経過月を示す

その傾向としては、生後5～6ヶ月頃に第1後臼歯と第1前臼歯が萌出する。次に犬歯と第3切歯が9～12ヶ月頃、第2後臼歯、第1切歯は13～15ヶ月頃に萌出し、その後、第2切歯が18～22ヶ月頃に生える。第3後臼歯は生後約2年前後で萌出する。永久歯のうちで最後に萌出するのは、上顎の第3後臼歯であり、およそ2年前後で永久歯の萌出は完了する。したがって、下顎骨に関しては生後2年以内の個体については歯の萌出段階を観察することによって2～3ヶ月単位での齢査定が可能となる。歯の萌出段階による齢査定のすぐれている点は、ある程度の幅はあるものの、実際の月齢を推定できる点にある。しかしながら、この方法では全ての永久歯が萌出した後、すなわち、下顎骨については生後約2年までの個体しかその齢を判別することはできない。したがって、永久歯の萌出が完了した個体については、別の齢査定の方法を使う必要がある。比較的簡便な方法で従来から採用されてきたのが、歯牙の咬耗の程度による相対齢の査定である。

遺跡から出土する動物骨のうちヤギ、ヒツジ、イノシシ及びブタに関しては、グラントが咬耗による相対年齢の査定を体系的にまとめている (Grant 1982:494, 図5)。グラントは各咬合面の形態に応じて、T.W.S. (teeth wear stage: 歯牙咬耗段階) を定義し、それぞれの段階に得点を与えている。永久歯の萌出する順序が決まっている後臼歯の T.W.S. の総和を M.W.S. (mandible wear stage 下顎骨咬耗段階) として、



萌出未完了時

- C (1): 萌出範囲がミシン目状になり特定できる状態
- V (2): 歯槽が開き、歯牙が見えるが、萌出していない状態
- E (3): ちょうど萌出した状態
- H (4): 歯冠が半分以上(高さ)萌出した状態
- U (5): ほぼ萌出は完了しているが、磨耗していない状態

図5 イノシシの下顎骨における歯牙咬耗段階 (Grant 1982 を改変)

相対年齢の基準としている。グラントは、遺跡から出土する動物骨にどのような T.W.S. の組み合わせが見られるかについて複数の遺跡で検証すると同時に、前臼歯についても T.W.S. を定義している。遺跡から出土する動物骨は破損していたり、歯牙が顎骨から遊離していることも多いため、必ずしも後臼歯がそろっているとは限らない。逆に、一部の後臼歯が欠けている場合でも、前臼歯が残っていることもあり、前臼歯と一部の後臼歯の組み合わせで、M.W.S. の推定が可能なことが多い。ただし、

咬耗指数を用いた齢査定はあくまで相対齢を知るために用いられる方法であり、とりわけ異なる集団の齢構成を比較する場合には注意が必要である。なぜならば、咬耗の進行は必ずしも同じ速さで進むとは限らず、とりわけ食性の差による影響は大きいからである。

4.2 分析資料

今回分析の対象としたのはパイワンの男性 S 氏が約30年間に捕獲したイノシシの下顎骨158個及び S 氏の弟である L 氏が約15年間に捕獲したイノシシの下顎骨100個である。これらの下顎骨は2人の家屋の軒先にそれぞれ吊り下げられていた。パイワンに限らず、台湾原住民の男性は、狩猟で捕獲したイノシシの下顎骨をトロフィーとして家屋の軒に吊り下げておく慣習を有しており、S 氏、L 氏も自分の捕獲したイノシシの下顎骨を保有していた。狩猟方法に関しては、先述した脚くり罽ととらばさみで捕らえられた個体が大半である。S 氏が保有していた下顎骨のうち数個体は、罽猟の見回りの際に連れて行った犬が捕らえたものであることが聞き取りによって明らかとなっており、これらの個体は分析から除外した。したがって、分析の対象となった資料に弓矢や銃火器などを用いた追跡型の狩猟方法で捕獲された個体は含まれていない。

S 氏と L 氏の狩猟行動における違いは2点ある。1点は罽の見回りの頻度の違い、もう1点は罽を設置する場所を変更する頻度の違いである。

罽の見回りの頻度に関しては、L 氏の見回りの頻度が安定しているのに対して、S 氏の見回りの頻度は、農耕活動との関係で変動していた。パイワンはアワとサトイモを中心とした焼畑農耕を伝統的に行なってきた。アワ畑の開墾、播種、間引きが行なわれる12月から4月前半までは農繁期にあたり狩猟活動は低下する。S 氏はパイワンの伝統的な生業活動をほぼ踏襲した生活を続けており、狩猟活動にも従事していた際には、通常は1週間に1度猟場を見回っていたが、農繁期には半月に1度程度になると同時に罽の設置場所も頻繁に変えることはなかった。このため、S 氏の罽にかかった獲物が見回りの時にはすでに腐ってしまっており、利用できない場合があったという。こうした場合でも捕獲した個体の下顎骨は必ず持ち帰り、懸架をしていた。一方、L 氏は儀礼に必要な分量のアワを作付けしているにすぎず、1年を通して週に1度は必ず猟場の見回りを行ない、捕獲した獲物を持ち帰ると同時に、猟場の様子を見ながら、罽の設置場所を変えることも少なくなかった。使用していた罽の種類の違いも設置場所の変更に関係していた。S 氏は脚くり罽ととらばさみとを併用していたの

に対し、L氏はとらばさみのみを使用していた。とらばさみは基本的に穴を掘って埋め込むことによって設置できるのに対し、脚くり罌は材料の調達や設置に多少の時間がかかる。このため、S氏は、農繁期の忙しい時期には、罌が獲物がかからないまま跳ねてしまったり、獲物がしばらくかからない場合でも、一旦設置してしまった脚くり罌をそのままにしておくことが多かったということであった。

4.3 結果

最初に、歯牙の萌出時期ごとの個体数を算出した(表2)。S氏の捕獲個体群において、萌出段階⑤(歯列 i12I3CP1p234M1)、⑥(歯列 i12I3CP1p234M12)をもつ個体は当歳から1歳にかかる個体を含んでいる。萌出段階⑦(歯列 I1i2I3CP1p234M12)の個体は1歳以上の個体と考えることができる。⑤または⑥の個体には、当歳獣及び1歳獣が含まれている可能性があるため、萌出段階⑤、⑥、⑦それぞれのM.W.S.を比較したところ、萌出段階⑦を有する個体はM.W.S.≥16であった。したがって⑤及び⑥の個体でM.W.S.≥16の9個体については1歳以上の個体と判断した。次に1歳獣の上限については、萌出段階⑫(歯列 I123CP1234M123)を有する個体からを2歳以上の個体と考えた。萌出段階⑪(歯列 I123CP1234M123¹)の個体群は1歳から2歳にかかる個体が含まれている可能性がある。萌出段階⑫は月齢が23.2ヶ月以上であり、月齢が23.4ヶ月までの範囲にある萌

表2 S氏とL氏の捕獲個体数の度数表

萌出段階	歯列	S氏捕獲個体数	L氏捕獲個体数
①	i13cp34	0	0
②	i123cp234	5	4
③	i123cp234M1	12	9
④	i123cP1p234M1	37	22
⑤	i12I3CP1p234M1	12	10
⑥	i12I3CP1p234M12	15	3
⑦	I1i2I3CP1p234M12	10	10
⑧	I1i2I3CP1p2P34M12	10	6
⑨	I1i2I3CP1234M12	6	5
⑩	I123CP1234M12	7	6
⑪	I123CP1234M123 ¹	6	8
⑫	I123CP1234M123	37	17
Total		157	100

I123CP1234M123¹は第3後臼歯の第1,2咬頭が萌出した状態

出段階⑩をもつ個体とも一部重複する可能性がある。そこで、当歳獣の上限を判断した場合と同様に萌出段階⑩, ⑪, ⑫の M.W.S. を比較すると、萌出段階⑫は M.W.S. ≥ 23 なので、萌出段階⑩, ⑪の個体中 M.W.S. ≥ 23 である 3 個体を 2 歳以上と判断した。また、M.W.S. が判定できない個体が 3 個体あったが、これらは萌出段階③もしくは④を有することから当歳獣と判断できた。以上より、当歳獣が 72 個体 (45.9%)、1 歳獣が 45 個体 (28.7%)、2 歳以上の個体が 40 個体 (25.5%)、分析不能 1 個体という結果が得られた。同様な分析を L 氏の個体群についても行なったところ、当歳獣が 45 個体 (45.0%)、14 歳獣が 38 個体 (38.0%)、2 歳以上の個体が 17 個体 (17.0%) という結果が得られた。

ところで、歯列ごとの捕獲個体数は一様ではなく、特定の歯列をもつ期間が長ければ、その歯列を有する捕獲個体数が多くなる可能性があるため、各歯列の個体数を歯列の持続期間によって割ることによって 1 ヶ月あたりの捕獲個体数を算出する必要がある。今回の齢査定ではボイタニらの発表した基準を用いた (Boitani and Mattei 1991: 420)。ボイタニらは上顎と下顎の両方について、歯列のパターンを分類し、それぞれの出現時期の平均を週単位で示している。ボイタニらの基準を採用した理由は、彼らの結果が他の研究者のものと大きく矛盾していないこと、また平均週の標準誤差が示されていたので、これから標準偏差を算出することが可能となり、統計学的に算出された萌出時期の幅を用いることが可能であったためである。各時期で捕獲された平均個体数には違いが見られ、捕獲数が最大となったのは S 氏、L 氏ともに生後 5.1~9.6 ヶ月にあたる萌出段階④をもつ個体群であった。平均個体数は S 氏が 8.2 個体、L 氏が 4.9 個体であった。

5. 考 察

5.1 捕獲数パターンとその要因となる背景

生業活動における狩猟行動の位置づけが捕獲個体数にどのように反映しているかについて、S 氏と L 氏の捕獲個体の年齢構成の比較をもとに検討する。両者の年齢ごとの捕獲個体数及び萌出段階①から⑩までの個体数を比較したところ、いずれも統計学的な有差は認められなかった ($\chi^2=7.49$, $P>0.05$)。すなわち、バイワンの生業カレンダーにもとづいた S 氏の狩猟行動の変化は、実際にイノシシを捕獲する時期に影響を与えていないことになる。換言すれば、アワ作といった農耕活動を複合的に組

み込んだ生業カレンダーにおける罾猟には季節性は見られないということになる。

次に、S氏の狩猟行動の変化が捕獲個体数には反映されない一方で、S氏が捕獲した当歳獣、1歳獣では月齢による捕獲個体数の差が生じている。この背景について考察を加える。台湾イノシシはニホンイノシシと同様に春に出産期を迎えることが知られている。趙らは台湾の猟師を対象にイノシシの生態に関する聞き取り調査を行っている。これによると、台湾イノシシは9月から10月にかけて発情し、10月から12月にかけて交配、約4ヶ月の妊娠期間をへて、3月から4月にかけて出産するという生殖カレンダーをもっていることが示されている(趙 1988: 14-18)。S氏の捕獲した個体が3月から4月にかけて出産したと仮定した場合、1ヶ月あたりの捕獲数が最大となる6~7ヶ月齢の個体は8月から翌年の1月にかけて捕獲されたことになる。これは台湾イノシシの発情及び交配の時期に重なっている。これは、母イノシシが交尾の準備にはいるころから当歳獣の親離れが起こり、経験の浅い当歳獣が単独もしくは幼獣だけで行動する機会が増えるために、罾にかかる確率が高くなると考えることができる。また、イノシシは当歳獣から生殖可能であり、雌を捜すために当歳獣の雄が分散することによって罾にかかる率が高くなっている可能性も考えられる。この問題は、この時期に捕獲された各年齢の性別を判定することによって検証可能であり、今後に残された課題の1つである。

5.2 考古学資料への援用

先述した新美の論考では、現生ニホンイノシシの後臼歯の萌出状態にもとづいた独自の萌出段階を設定しており、各歯牙の咬頭が萌出する時期も細かく区分している(新美 1991: 132)。咬頭の萌出状態を差異化することの意義は別の議論として、ここでは、伊川津遺跡の出土資料と筆者のデータとの比較を行いその結果の解釈を試みる。

図6は、M2の萌出までをI期、M3の萌出までをII期、それ以降をIII期として、S氏の捕獲個体と伊川津出土遺存体とをグラフ化したものである。M2の萌出は生後10.7~13.5ヶ月の間、M3の萌出が23.2ヶ月以降と仮定した場合、Iはほぼ当歳獣、IIはほぼ1歳獣で、IIIは2歳獣以降ということになる。両者を比較した場合、伊川津の出土イノシシはS氏が捕獲した個体に比べて年齢が高いという傾向が見られる。こうした結果が生じる1つの原因には、伊川津の出土資料に何らかのバイアスがかかっているということが考えられる。例えば、若齢獣の動物骨は埋没中に破損などの影響を受けて分析資料として扱えなかった可能性である。これを検証するためには、他の出土遺物の残存状況、発掘の過程で受けるバイアスの評価といった遺物形成作用に

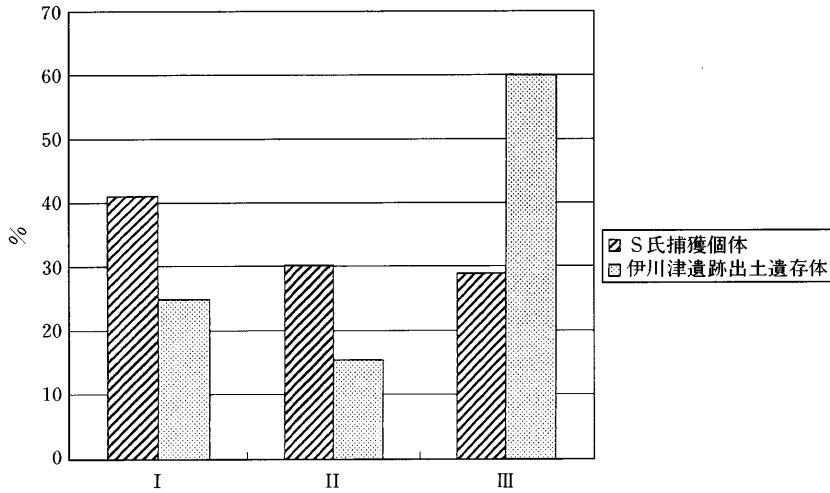


図6 遺跡出土資料と民族考古学データとの比較

関する方法論的検討が必要となる。

もう1つの説明は狩猟方法の違いという解釈である。すなわち、伊川津遺跡では、バイワンが採用していた罾猟やそれに類似した狩猟方法がとられていなかった可能性があるということである。伊川津の出土個体は2歳以上の成獣の割合が高い。これは、より大きなサイズの個体を捕獲するという選択が猟法に組み入れられたことを意味する。罾猟に限れば、多くの場合は体重でその調節が行なわれる。S氏やL氏が採用していた脚くり罾やとらばさみは、作動体重の調節が当歳獣や1歳獣以下の個体を排除するような微妙な調節はできない。また、伊川津遺跡の出土個体には、構成比は少ないものの当歳獣、1歳獣も捕獲されており、罾猟を必ずしも否定するものではない。罾猟の特徴は罾を一旦設置してしまえば、それ以降は動物側からの接近を待たざるをえないという点にある。つまり罾の設置の段階では捕獲個体の選択を試みることはできるものの、実際の捕獲時には人間の意図は反映されないということである。換言すれば、罾猟がいわば日和見的性格をもった猟法であり、サイズや性別が厳密に選択される例は少なく、結果として最も個体数が多く経験の浅い若齢獣が捕獲されていくということになる。一方で、人間自身による追跡猟、犬を使った追い込み猟などは、実際の捕獲段階に狩猟者側が捕獲個体を認知でき、罾猟などに比べて捕獲個体の選択の余地が残された猟法と言える。こうした点を考慮した場合、2歳以上の個体が全体の6割を占める同遺跡では、主に採用されていた狩猟方法が、罾猟やそれに類似した猟法ではなかったと考えることが適当であろう。こうした猟法の違いが捕獲個体

の齡構成に与える影響については、現在、行なわれている犬を使った追い込み猟などの民族考古学的調査によって得られる同様なデータを用いて検証することにより、より精緻な議論が可能となる。

6. 結 語

本研究ではイノシシを対象獣とした罾猟が行なわれた結果生じる考古学的な証拠に関していくつかの新たな知見を得た。それは次のように要約することができる。

通年に行なわれていた罾猟を通して捕獲された個体は当歳獣、1歳獣といった若齡獣に齡構成が偏る傾向がある。また、月齡の分析からは、発情期の前後に捕獲個体数が増加する傾向が強い。これらは、動物の行動に熟知した狩猟者が罾猟を行なった場合、罾の形態、見回りの頻度やそれともなう設置場所の変更の回数などといった人間の活動に多少の差が存在するものの、こうした差異が実際に捕獲されるイノシシの個体には反映されにくいということである。一方で、狩猟行動の細部にわたる活動差よりもイノシシの生態学的な性質が罾猟の結果に強く影響するため、捕獲個体数のパターンにはイノシシの生態学的な性質が反映していくことになる。このことは、野生動物の個体数調査などを行なう際にとられる方法が罾を用いたものであることなどからも支持される結果である。

本調査で用いたイノシシの下顎骨はある一定のテリトリーの中で罾猟を行なった場合に生じた物質的記録、換言すれば、潜在的な考古学的記録と考えることができる。考古学資料は様々な手法を用いて分析することはできても、その結果を解釈するためには、必ず解釈の材料となるモデルが必要となる。とりわけ、狩猟形態とその結果を結び付ける情報として、同様な出土遺物をもつ遺跡の解釈には、本研究が提示するデータ及びその解釈は有効であると考えられる。とりわけ、イノシシを対象とした狩猟活動が盛んに行なわれてきたとされる日本の縄文時代や東アジアにおける狩猟と農耕との複合的生業を基盤としていたと考えられる集団について、同様な定量的分析を行なった場合に得られるデータの解釈を、季節性や狩猟法といった観点から今回の知見と比較することは今後の課題と考えられる。

謝 辞

本稿の基礎となった台湾における調査は、順益台湾原住民博物館の研究助成金（平成9年度）

により可能となった。また、台東県達仁郷でのフィールド調査に際しては、地元の住人の方々にたいへんお世話になった。

以上、記して深く感謝の意を表する。

文 献

- Bartram, L. E.
1993 *An ethnoarchaeological analysis of Kua San (Botsuwana) bone food refuse*. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, The University of Wisconsin, Madison.
- Binford, L. R.
1978 *Nunamiut ethnoarchaeology*. New York: Academic Press.
- Boitani, L. and L. Mattei
1992 Aging wild boar (*Sus scrofa*) by tooth eruption. In F. Spitz, G. Janeau, G. Gonzalez and S. Aulagnier (eds) *Ongulés/Ungulates 91* (Proceedings of Ongulés/Ungulates 91), pp. 419-421. Paris-Toulouse: S.F.E.P.M.-I.R.G.M.
- Chang, K. C.
1958 Study of the Neolithic social groupings: Examples from the New World. *American Anthropologist* 60: 298-324.
- 趙 榮台, 方 国運
1988 『台湾野猪 (*Sus scrofa taiwanus*) 之生態興行為研究 (I)』台北: 行政院農業委員會。
- Genov, P. V., G. Massei, Z. Barbalova and V. Kostova
1992 Aging wild boar (*Sus scrofa* L.) by teeth. In F. Spitz, G. Janeau, G. Gonzalez and S. Aulagnier (eds) *Ongulés/Ungulates 91* (Proceedings of Ongulés/Ungulates 91), pp. 399-402. Paris-Toulouse: S.F.E.P.M.-I.R.G.M.
- Grant, A.
1982 The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates. In B. Wilson, C. Grigson and S. Payne (eds) *Aging and sexing animal bones from archaeological sites* (British Archaeological Reports British Series 109), pp. 91-108.
- 伊能嘉矩
1904 『台湾蕃政志』台北: 台湾総督府民政部殖産局。
- 金子浩昌・忍沢成視
1986 『骨角器の研究: 縄文篇 I』東京: 慶友社。
- 新美倫子
1991 「愛知県伊川津遺跡出土ニホンイノシシの年齢及び死亡時期査定について」『国立歴史民俗博物館研究報告』29, 123-148。
- 野林厚志
1997 「過去の復元とエスノアーケオロジー」『民博通信』76, 80-89。
- O'Brien, C. J.
1994 *Determining seasonality and age in East African archaeological faunas: An ethnoarchaeological application of cementium*. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, The University of Wisconsin, Madison.
- O'Connell, J., K. Hawkes and N. Blurton-Jones
1988 Hadza hunting, butchering, and bone transport and their archaeological implications. *Journal of anthropological research* 44: 112-162.
- ラッカム, J.
1997 『動物の考古学』本郷一美訳, 東京: 学芸書林。
- 臨時台湾旧慣調査会
1918 『蕃族調査報告書 排灣族 獅設族』台北: 臨時台湾旧慣調査会。
- 佐藤宏之
1998 「兕獣のエスノアーケオロジー——過去と現在の架橋」民族考古学研究会編『民族考古学序説』pp. 160-176, 東京: 同成社。

台湾総督府蕃族調査会

1922 『蕃族慣習調査報告書』第五卷ノ三, 台北: 台湾総督府蕃族調査会。

谷 正和

1998 「過去と現在の接点: 考古解釈と民族誌情報」民族考古学研究会編『民族考古学序説』
pp. 208-225, 東京: 同成社。

Thomas, D. H.

1990 *Archaeology* (2nd edition), Florida: Holt, Rinehart and Winston, Inc.

渡辺 仁

1993 「土俗考古学の勧め——考古学者の戦略的手段として」『古代文化』45(11), 1-14。

臧 振華

1995 『台湾考古』台北: 行政院文化建設委員会。

中華民國自然生態保育協會

1994 『台湾的自然生態保育』台北: 中華民國自然生態保育協會。